

彩色・無彩色図形におけるイメージの
投影について

門前 豊志子

彩色・無彩色図形におけるイメージの 投影について

門前 豊志子

外界の事物の知覚や認知はどのようになされているのであろうか。個体は、さまざまな事物や事象を見たり、感じたりして、それらに何らかの意味づけを与え、それにもとづいて外界に働きかけている場合が多い。つまり、単なる外界の事物や事象の知覚にとどまらず、その事物や事象のなかに個体自身の経験や学習にもとづいたさまざまな感情や感覚を投入しているといえる。特に個体にとって関心の高い、自我関与の強いでき事に遭遇する場合、それらに対する感情移入は大きくなるであろう。たとえば、親しい友人を応援するときには、思わず知らず身をのり出して声援している自分に気がつくことがあるし、また、急いでハガキを投函しないといけないときには、常日頃気にもとめていなかったポストの所在が気になりあわてて探し求めることであろう。また、急用の場合は、電車のスピードが遅く感じられたり、逆に行きたくない所用のときには、速く着いたように思うことも日常経験することである。

このように外界のさまざまな事象や事物を把握してそれらに対応した行動をおこす場合、物理的、時空間的には同一の現象であっても、それを認知する個体の欲求や情緒状態によって、心理的には異なって認知されると考えられる。ゲシュタルト学派のコフカは、この点に注目して、従来の生理的・知覚的な場の認知の考えを一歩おしすすめ、個体と外界との力動的な相互関係の重要性を強調して、心理的環境、心理的意味空間としての環境（場）が人間の行動の決定に影響を与えると説いている。（八木、1967）

このように、個体が外界を知覚し、認知するとき、単に、感覚的、生理的、

物理的なレベルのみで外界の事物や事象をとらえているのではなく、個体の欲求、感情を投入して、すなわち、個体の内的状態との関係で外界をとらえ（認知し）、行動（反応）を決定している場合が多いと考えられる。

個体が内的感情を移入して外界の事象をどのようにとらえているかを知る手がかりとなる心理学的方法に、投影法がある。なかでもあいまい図形に投影された反応内容の分析を通して、個体の無意識的な深層の欲求や感情など個体の内的状態を探るロールシャッハ法は、今日、すでに臨床的にその有効性が認められてきている。（片口、1969; Klopfer, Ainsworth, Klopfer, & Holt, 1954; Schaffer, R.1954）。

筆者は、これまで、ロールシャッハ法にもとづく個体の内的理解をすすめるなかで、ロールシャッハ法という限られた枠内にとどまらず、広く、普遍的且つ実験心理学的な立場から、投影のメカニズムについて、とらえてゆけないものかと考えるに至った。たしかに、あいまいな図形は、その図形の性質上、さまざまな情緒的負荷を伴ったイメージや連想をよびおこし易い。そこに投影された内容を分析することによって個体の無意識的な深層領域に迫り、個体の精神内界をある程度了解可能ならしめてきたし、精神医学的な治療や診断にも重要な手がかりを与えてきた。しかし、ロールシャッハ法などの投影法的解釈や手がかりをめぐにして、一般に、個体が外界を認知するさいに、共通して認められる投影のメカニズムが存在しはしないだろうかと考え、もし存在するとすれば、その投影的側面を明確にしてゆけないものかと考えた。従って図形もあいまいな図形は、日常見慣れている事物としては少なく、特殊な図形であると考えられるので、あいまいでない、ごく一般的で普遍性のたかい図形について、どのように投影がなされているかを、動きの投影を中心に検討してきた（門前、1982）。

そのさい明らかになったことは、運動量と運動の速さ及び方向性とは、同一の次元で捉えるべきではなく、動きの量的側面と動きの質的側面という異なる次元として捉える必要があるということであった。また、個体の状態として、

快的な情緒状態と不快な情緒状態という異なる二つの情緒状態を設定して、それらが動きの投影にどのような影響を与えるかを調べたのであるが、結果は、快的な情緒状態では、速さも早く、方向性においても自由な動きの投影が可能であったのに対し、不快な情緒状態では、速さと方向性が一對となって、相補う関係を保ちながら、不快な情緒に対応していることが明白となった。不快な状態におけるこの特徴を筆者は不安に対する速さと方向性の相補的關係と名づけてみた。更に、図形の性質と動きの投影との関係で示唆されたことは、図形の形態上の安定性と速さとの関係である。門前(1982)の実験では十分な分析が不可能であったが、安定性の高い図形(円形)ほど速さは遅くなり、安定性が低くなる程(不等辺図形)速さが早くなる傾向を示すことであった。

目的

本研究も門前(1982)の研究の延長として、図形の性質と個体の情緒状態との関係が投影に及ぼす影響について、明らかにしてゆきたい。図形の性質については、形態の安定した図形と不安定な図形、及び、色彩をもつ図形ともたない図形という側面から捉え、情緒状態については前研究と同じく快・不快という異なる二つの情緒状態から捉えてゆくことにする。投影のメカニズムについては、今回は、動きの投影の分析ではなく、イメージ内容についての分析を行う。

色彩の有無と図形の形態上の特性とが、イメージの投影にどのような影響を与えるのかを、情緒的に異なる二群について調べてみることを目的とする。

情緒的に快的な群と不快な群とでは、色彩や形態の特性に対してイメージ内容に相違が認められるのではないかと予想されるが、実験的にそれらの特徴を明らかにしてゆくことを目的としたい。

方 法

被験者 看護学校・保育専門学校の学生117名、年令18～19歳。被験者を

無作為に次の4群に分けた。実験的に快的な情緒状態におかれ、黒色と白色図形の組合せからなる図形の系列を提示される群（以下CO₁群と略記する）45名。同じく快的な情緒状態で灰色と白色図形の組合せからなる図形の系列を提示される群（以下CO₂群と略記する）16名。不快な情緒状態におかれ黒色と白色図形の組合せからなる図形の系列を提示される群（以下UC₁群と略記する）42名。同じく不快な情緒状態で、灰色と白色図形の組合せによる図形の系列を提示される群（以下UC₂群と略記する）16名である（表1）。

表1 実験計画

実験群	人数	図形刺激	情緒状態
CO ₁ 群	45 名	黒色系列	快的状态
UC ₁ 群	42 名	黒色系列	不快状态
CO ₂ 群	16 名	灰色系列	快的状态
UC ₂ 群	16 名	灰色系列	不快状态

図形刺激 15枚の幾何学図形からなる。それぞれの図形は彩色と無彩色の二種類から成る。彩色図形は明度の低い黒色と、明度の高い灰色であり、無彩色図形は白色である（図1）。

幾何学図形の形態は、きわめて単純な等辺図形9枚と、不等辺図形1枚、及び円形と円形の集合した図形5枚の計15枚から成っている。

黒色図形と白色図形の組合せからなる図形の系列が1組（以下黒色系列と略記する）と、同じ図形、同じ順序で提示される他の一組の図形の系列に、灰色と白色の組合せからなる図形の系列（以下灰色系列と略記する）が1組ある。
















図形番号	1	2	3	4	5	6	7	
図形								
図形番号	8	9	10	11	12	13	14	15
図形								

図1. 図形刺激（同一の図形で黒色と灰色系列がある）

情緒状態 門前 (1982) の研究と同じ音刺激を使用した(図2)。これは、エレクトーン演奏による協和音、不協和音のカデンツをテープレコーダーに録音したものである。作曲は、専門の教師に依頼した。すでに、評定の信頼性・妥当性は検証されている。

A $\text{♩} = 40$

B $\text{♩} = 40$

図2. 協和音 (A) と不協和音 (B)

手続き 実験日時を異にして、CO₁、CO₂、UC₁、UC₂群の4群に、快・不快の情緒状態をひきおこさせるよう部屋の後方中央から左右のスピーカーを通し、適度な音量で、音刺激をくり返しきかせる。被験者は、前方中央のスクリーンに、スライドにて影写される図形刺激をそれぞれ5秒間凝視したあと、手元の記録用紙に、運動量(1から5までの5段階評定尺度)、動きの速さ(1から3までの3段階評定尺度)、動きの方向性(矢印か文字でその方向を示す)とイメージ内容(文字で記入)を10秒間の間に記入するよう指示される。実験課題に入る前に、練習課題を2題与え、練習させて要領を会得させた。

実験課題が終了するまで音刺激は持続してきかされた。

整理法 今回はイメージの投影を中心に分析する。それぞれの図形別に投影されたイメージ内容のうちで多数を占めた上位3位までの内容を取りあげ、各図形別、各系列別、各群別に整理した。イメージ内容については、快的内容と不快な内容及びそのいずれでもない中性的内容に大別した。同一図形の上位3位までに、快的内容と不快な内容、あるいは、不快な内容と中性的内容、または中性的内容と快的内容にまたがって分布している場合には、両方の内容と考え、それぞれの内容について、快、不快、中性、両方と分類した。

結 果

以上の方法で得られた結果は、表2、図3、4、図5に示す通りである。

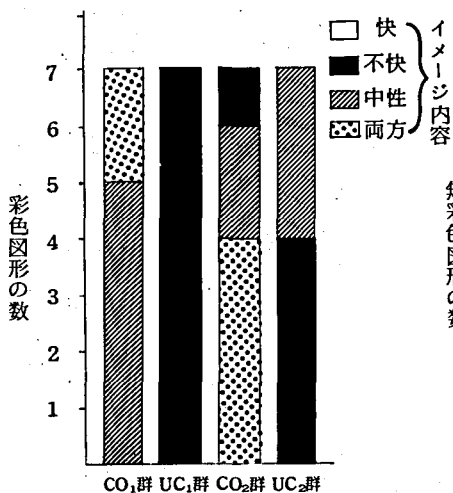


図3. 彩色図形における各群のイメージ内容の比較

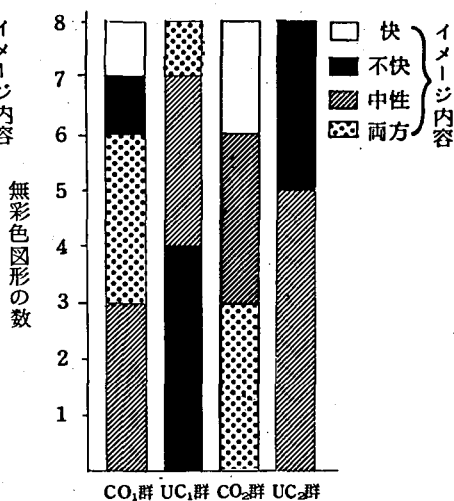


図4. 無彩色図形における各群のイメージ内容の比較

表2 各群における上位3位までの図形別イメージ内容の比較

実験群 図形刺激	CO ₁ 群	UC ₁ 群	CO ₂ 群	UC ₂ 群
1	ピラミッド, 山, 三角形	あがる, 重い, どっしり	山, ピラミッド, 三角形	ピラミッド, 三角形, 山
2	レコード, ドーナツ	飛ぶ, 迫る	広がり, 波紋, ドーナツ	ドーナツ, 広がり, レコード
3	丸い, 水滴	不安定にひろがる	足跡, 花	広がり, 足跡, 花
4	花, 重い, 暗い	うずまき, ひろがる, すいこまれる	向ってくる, 広がり, ピラミッド	花, マーク
5	ばらつきあり	倒れる, すいこまれる	結晶, 風車	結晶, ステンドグラス
6	ばらつきあり	冷たい, 広がり	楽しくまわる, 花, 収縮	迫ってくる, 勢いよくとぶ
7	不安定	不安定	たこ, ロケットがとぶ, おちる	勢いよくとぶ, 不安定
8	暗い, 重い, 箱	暗い恐怖, 不安, 重い	暗い, 広がり	暗い
9	まわる円, シャボン玉	楽しい, 明るい, 広がりまわる	軽い, 花	花, ダイアル, 雪
10	ダイヤモンド 他	暗い恐怖, ひろがり	広がり 他	亀の甲, 重い, 暗い
11	折り紙 他	不安定	折り紙 他	窓, 豆腐
12	五角形 他	不安定, とぶ, ひろがり	重い	飛ぶ, 五角形, 向ってくる
13	三角形, 軽い	とぶ, 軽い	ピラミッド, 山, 軽くとぶ	不安定にとぶ, 不安定, 三角形
14	穴, 日食, 球	暗い恐怖, 不安	日食, 軽い	重い, 暗い
15	星 他	ゆったり	三角形, 早くころがる	五角形, 広がり

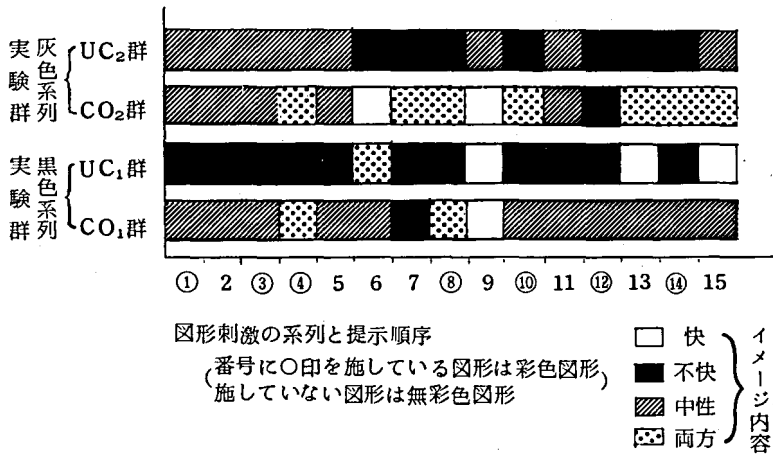


図5. 図形の継時的流れとイメージ内容の各群における比較

これらの結果を図形の形態別、彩色・無彩色別及び系列別に、イメージ内容との関係から、情緒的に異なる二群間にどのような特徴が認められるか分析を試みる。

(1) 図形別イメージ内容の特徴について

まず15枚の図形の形態及び色彩別イメージ内容とCO₁、CO₂、UC₁、UC₂群間の特徴について検討してみる。図5、表2から判るように図形1についてはUC₁群が他の3群とは異なるイメージ(重い、あがる)を投影している。図形2、3も同様、UC₁群が、迫る、飛ぶ、不安定に広がるといった動きを伴ったイメージの投影が多いことが特徴的である。図形4は、4群共にイメージに共通性が少なく、それぞれ各群固有のイメージを投影していることが判る。図形5は、UC₂、CO₂群は、類似したイメージ内容であるが、UC₁群は、倒れる、吸いこまれるという不安を暗示する内容が多いのに対し、CO₁群は、さまざまなイメージの投影を与えていることが特徴的といえる。図形6は図形4と同様4群間にそれぞれイメージ内容に差異が認められる。図形7は、4群共、不安定感を投影した点で共通のイメージ内容が認められる。図形8も暗いというイ

メージを投影する点では、4群共通しているが、UC₁群の暗いイメージの内容は、抑うつ的な重苦しい感じよりも、恐怖心の混入した暗さである点において、他の3群とは異なっているといえる。図形9についても同様、UC₁群は他の3群に比べて、楽しいという快的反応を多く投影していることが判る。

図形10, 11, 12についても、UC₁群が他の3群、特に同じ情緒状態にあるUC₂群に比べ、恐怖感や不安定感を多く示しているのが特徴的である。

図形13については、UC₂群が他の3群に比べ、不安定な内容のイメージをやゝ多く示し、図形14については、UC₁, UC₂群が、暗い不安感や恐怖感を示しているのに対し、CO₁, CO₂群は“日食”という中性的な内容ともいえる自然の現象をイメージとして多く投影していることが判る。

図形15については、CO₁群を除き3群共に、動きを伴ったイメージが認められた。

(2) 彩色・無彩色図形とイメージ内容について

15枚の図形のうちで彩色された図形はそれぞれの系列共同じて7枚、無彩色も両系列共同じて8枚である。それらの図形についてイメージ内容の結果をまとめたのは、図3、図4である。

イメージ内容を区分するにあたって、“三角形”“山”といった内容は、イメージにあまり情緒が投入されていない中性的な内容であると考え、中性とし、それらに対して、“暗い”、“不安”、“恐怖”といったイメージは、不安な情緒が投入されていると考えられるので、不快な内容であると判断し、“楽しい”、“踊っている”といった内容は、快的な内容であると考えて区分けした。また、同一の図形に、快・不快の両方を投影している場合は、両方と判定した。

まず、大別したそれらの内容が4群間でどのような傾向を有しているのかを調べてみる。図3、4から判るように、4群それぞれの傾向として、彩色図形の方が、無彩色図形よりも不快な内容を多く投影していることが判る。特に、UC₁群は、彩色図形に対して不快なイメージを多く投影していることが明らかである。無彩色図形では同一の図形に対して、快・不快あるいは、快・中性と

いった両方のイメージ内容を多く投影しているのが特徴的である。次にCO₁、CO₂群とUC₁、UC₂群間の比較をしてみると、CO₁、CO₂群の方がUC₁、UC₂群よりも不快な投影の内容が少なく、無彩色図形では、快・不快・中性の変化に富んだイメージ内容の投影が多くなされている。黒色系列と灰色系列における各群の比較をしてみると、UC₁群が彩色図形すべてに不快な反応を投影していることと、無彩色図形に対しても他の3群よりも多く不快な反応を示していることが判る。次いで、UC₂群が彩色図形に不快な反応が多く、無彩色図形に対しても同様の傾向を示している。また、4群共無彩色図形の方が彩色図形よりも不快な反応内容が少ない。快的な反応内容は、CO₁、CO₂群の方により多いことが判明した。

(3) 図形の形態別、系列別特性とイメージについて

まず黒色系列の彩色図形で不快なイメージ内容を投影したUC₁群は、すべての図形に対して不快ということであるから、形態から不快な感情が惹起されたというよりも、黒色という色彩が、不安感、恐怖感を惹起させているのではないかと考えられる。同じ不快な情緒群であるUC₂群は、最初から提示された3枚の灰色図形に対しては中性的な内容にとどまっているが、その後提示された4枚の灰色図形に対して、不快な不安を示すイメージの内容が投影されている。灰色という色彩と、形態的には、正三角形、(図1)円形の集まり(図形2, 3)以外の等辺図形や大きい円形図形において不安感、不快感が惹起されていると同時に、図形の継時的な流れに伴って、不安感が強くなってきているように思われる。

つづいて、CO₁群の彩色図形におけるイメージの投影の特徴を調べてみると、図形14の“日食”を除き、色彩を考慮しない形態のみの反応内容で、しかも、情緒的負価の少ない中性的な内容で占められていることが判る。図形4, 8は、不快な内容、“暗い”、“重い”と、やゝ中性的な内容、“箱”“花”の両方にまたがっていることが判る。

これに対してCO₂群の彩色図形に対するイメージ内容の傾向をみてみると、

CO₂群に比べ、動きの加わったイメージが増大していることである。単に形態のみに注目した中性的な反応内容にとどまらず、動きの加わった情緒的負荷の伴う反応が認められる。動きの性質は、ゆっくりとした広がりや軽い動きが中心であり、図形の形態との関係では、円形や等辺図形については、ゆっくりと広がってゆく動き、軽く飛ぶ動きが認められ、不等辺四辺形では、早く飛ぶ、上昇する、下に落ちる動きがみられた。イメージ内容も、CO₂群の中性的な内容一辺倒に比べ、快と不快、中性と不快などの両方にまたがる変化の多いイメージの投影が認められた。

黒色系列における無彩色図形（白色）についてCO₂群のイメージ内容をみとみる。形態のみに注目して中性的で動きの伴わない反応を示しているのは、図形2、11、15の3枚である。図形5、6、9、13は両方（中性と快）の情緒的負荷を投入し且つ動き（まわる、軽い、飛ぶ）を伴ったイメージの投影がなされている。無彩色図形8枚のうち不等辺四辺形である図形7のみが、不快なイメージを惹起させていることが判る。

UC₁群について調べてみる。図形9、13、15は快的なイメージの投影がなされているが、あとの5枚は、不快なイメージの投影が多い。またCO₂群に比べて、動きを伴ったイメージの投影が多く認められるが、動きの性質も、“倒れる”、“すいこまれる”、“迫ってくる”、など不安感、恐怖感を内包させた意味あいの内容が多いことが判る。図形の形態との関係では、図形9の円形の集まりを図示した図形に最も快的なイメージ（楽しい、明るい）の投影がなされている。正三角形、正五角形については動きを伴った快的なイメージの投影がなされているが、正六角形、正方形と不等辺四角形については、不安なイメージが多い。

灰色系列における無彩色図形に対するイメージ内容をみとみる。イメージ内容は、CO₂群と余り変りはないが、動きがCO₂群よりも具体的な状況として表現され易くなってきている。図形7は、CO₂群ではきわめて不快な内容を示す唯一の図形であったが、CO₂群でもその点については同じである。たゞ、イ

メージ内容として“ものが落ちる”，“ロケットの発射（噴射）”という具体的な不安や攻撃性を暗示する表現をしている点で両群に差異が認められる。図形6は，CO₂群では多種多様な変化に富んだイメージ内容に分かれていたのに対して，“楽しくまわる”，“花”といった内容に集中している。

UC₂群について調べてみる。灰色系列のうちの8枚の無彩色図形のなかで，3枚が不快な内容，あとの5枚が中性的なイメージ内容を示している。3枚の不快な内容は，いずれも，動きを伴ったイメージで，“迫ってくる”，“不安定に飛ぶ”といった漠然とした恐怖感，不安感を強調するものである。中性的なイメージ内容を示した図形9，11では，図形の形態のみならず，白色という色彩にも注目して，“雪”，“豆腐”といった反応が投影されている。

考 察

以上の結果から考察してみる。本研究は，これまで検討してきた動きの性質と情緒的快・不快との関係を更に詳しく検討するための前段階として，イメージ内容に，情緒的に異なる二群と，図形の性質（形態と色彩）との間で，どのような特徴が認められるのかを中心に実験を試みた。

動きの投影と個体の内的状態，つまり情緒的快・不快の状態との関係では，前述したように，情緒的に快的状态にある場合は，動きが促進され易く，不快な状態にある場合には，動きが促進されにくい，あるいは，方向性と速さとの相補的關係の中で動きを捉える必要があるということが明らかにされたが，イメージ内容についての分析からどのような関係が認められるかについて検討してみる。色彩図形として黒色と灰色という2種類を使用しているので，それぞれの系列について個別に考えると同時に総合的にイメージ内容との関係をとらえ，その特徴を明確にしてゆきたい。

まず，系列別にその特徴について考察してみる。情緒的に快的状态にあっても，黒色と白色とが極端に対比する系列をもつ黒色系列の図形においては，

CO₁群でも快的なイメージ内容はほとんど認められず、中性的な内容にとどまっていることが顕著に認められる。UC₁群では、黒色図形すべて不安や恐怖を伴ったイメージで占められているように、黒い色彩が、図形の形態を圧倒して不安や恐怖感を惹起させる大きな要因となっていることが推察される。しかも白色の図形においても、UC₁群では、CO₁群に比べて、不安定な動きを伴ったイメージを投影させ易くなっているのが特徴的で、CO₁群のように、不安ながらも、不安感や恐怖感を伴わないような中性的で、抽象的な内容にとどまることのできない内的な混乱状態、不安状態が示されていると理解されよう。また、UC₁群では、黒色図形と白色図形に対するイメージ内容が、極立って異なっているのもその特徴で、継時的な黒色と白色の対比関係が顕著に捉えられたことは、注目に値するといえる。たとえば、黒色系列の次に白色のしかも安定した形態を有すると考えられる円形の集合図形（図形9）に対して、不安な状態から一息に解放されたかの如く、“楽しい”、“明るい”イメージを投影しているなどである。このように、不安な状態における黒色の色彩が、いかに個体の内的不安感を増大させているかが、この対比反応から読みとることができたと考えてもよいだろう。また、CO₁群の白色図形7に投影された不快な内容は、他の白色図形への投影内容とは異なったイメージを表出している点で、等辺図形に対して不等辺図形という図形の不安定な形態が、不安感を惹起させているのではないかと考えられる。

次に灰色系列では、色彩と形態がどのような関係になっているのかを検討してみる。灰色系列ではUC₂群も、不快な内容ばかりではなく、色彩に影響されない中性的な内容を示すイメージが増加してきている。同一図形でCO₂群も、中性的なイメージが少なくなり、中性的と快的、あるいは不快と中性的な両方の内容にまたがったイメージ内容を示す傾向が多くなり、いわば、イメージが多様に投影され易くなっていることが判る。しかも、黒色系列の場合に比べて、両群とも動きの伴ったイメージが増加しているのが特徴的である。しかも、灰色の色彩が不安感を与えていると考えられるのは、CO₂群の場合、四角形（図

形8)と五角形(図形12)のやゝ角ばった形態を併せもつ図形のみであり、その他の六角形、三角形、円形では、灰色という色彩をうまく形態の中に統合させたイメージを投影していることが判る。

UC₂群は、CO₂群の上述の傾向に比べ、まだ灰色の色彩が、不快感を増大させている傾向はつよく、形態にかかわらず、色彩のもつ不快感に内的な情緒が刺激され易くなっていると判断される。灰色系列の場合において、黒色系列との相違は、無彩色図形において、不安感が少なく、しかも不安定な動きを伴ったイメージ内容が減少している点である。

以上のことを総合して考えてみると、まず、彩色図形の方が、無彩色図形よりも不安定な情緒を喚起し易いと結論づけられるだろう。今回は、黒色と灰色という2種類の色彩を使用したか、明度の低い黒色は、明度の高い灰色に比べて、個体の不安感・恐怖感を喚起させていることが判る。特に、情緒的に不快な状態にある個体にとって、黒色の色彩は、不安や恐怖を増大させることが明らかとなった。また、不安感・恐怖心は、不安な動きとなってイメージの中に投影され易いことも明らかとなった。CO₂群の結果から判るように、快的な状態で、不快な刺激を提示されると、不快と快とを折衷するような中性的な反応を多く示している。これら中性的な反応内容が図形とうまく適合している限りにおいて、個体が内的不快感を抑えるのに成功し、適応的な反応を示していると考えられるのではないと思われる。これらの傾向は、灰色という明度の高い色彩になってくると、内的な快・不快状態にかかわらず、不安感は軽減され、快的な状態におかれた個体では、中性的な内容から、より情緒を投入した、感情移入の豊かなイメージの投影が可能となるし、不快状態におかれた個体では、不快な内容は減少し、中性的な内容へと移行していつていることが明らかに捉えられた。従って、個体が、図形刺激(ひいては外界の刺激に結びつけて考えられると思われるが)を認知する場合、まず色彩が、個体の情緒に何らかの働きかけをし、つづいて形態の把握がなされ、最後に、色彩と形態との統合過程があつて、イメージが想起されるのではないかと推論される。色彩が強

烈に個体の情緒や情動を喚起すると、個体は動揺・混乱し、形態把握や、形態と色彩との統合をする能力を放棄させられ、情緒や情動によってのみ反応を決定してしまうことが推測される。日常生活場面において、暗やみの中やお化け屋敷などに入ると、危機状態や不安状況に陥って、判断力を失い、感情的行動や衝動的行動をとり易くなるということも上述の結果から了解される。不安が軽減されると、図形の認知も客観的になって、経験や学習を生かした多面的な観点から1つの図形を把握し、イメージ化できるようになっていくことが判る。情緒的に快的な方が、図形の色彩と形態をうまく統合させて、柔軟にイメージを想起させながら、状況を多面的に把握し易いことが示唆された。また不安の程度に応じてイメージ内容も不快→中性→快へと変化していくことが明らかとなった。

以上のことから、情緒的に極度に不安を喚起させられるような状態においては、たとえ個体が内的に安定した状態であっても、快的な動きを伴ったイメージの投影は少なく、むしろ不安定な動きを伴うイメージが、不快な状態を解消するために多く投影され、不安が軽減されるに従って、快的な動きを伴ったイメージの投影が増大していく傾向にあるといえる。それと共に、イメージ内容においても変化が認められる。つまり、極度に不安を喚起させられる状況では、イメージ内容は不快な不安や恐怖を示す内容が多い。特に、暗い、重い、恐ろしい、不安定なといった漠然とではあるが、不快感を象徴する内容が多い。不安が軽減される状況になるに従って、つまり、色彩としては、黒色、灰色、白色の順に、形態としては、不等辺四辺形に代表される不安定な形態から、正三角形、正六角形、円形といった安定した形態になるに従って、同じ不快なイメージ内容でも、“向ってくる”“広がってゆく”“早くころがり落ちる”といった具象的な表現内容へと変化してゆくのの特徴といえる。色彩に関しては、黒色→灰色→白色の順に、不安感は軽減されるが、黒色系列における白色図形と、灰色系列における白色図形とでは、イメージ内容に明らかな相違が認められたことは注目すべき点である。個体は、ある図形（ひいては外界の事物）を把

握し、認知する場合、図形の色彩にしても、形態にしても、そのものだけを単独に、独立させて把握しているのではなく、継時的に、しかも全体の構造の中で相対的に位置づけて認知し、全体の構造の枠組の中で比較検討しながら固有のイメージを想起させていると判断できる手がかりがこの実験から得られたと考えるとよいだろう。しかも快・不快という情緒的な気分が持続されている場合、全体の構造の把握にそれらの気分が影響して、イメージの中に感情移入されているわけであるから、黒色と白色の対比の方が、灰色と白色という対比よりも、快・不快の情緒に強く働きかけ、イメージ内容を限定していることが判る。図形の形態について考えてみると、円形、あるいは円形の集合図形は、他の辺形図形に比べて安定した図形と考えられるので、図形3、4にみられる如く、色彩があっても比較的不安感を介入させずにイメージを惹起させ易くしているといえる。しかし図形14のように安定した円形図形でも、大きい円形全体に色彩を有するような場合には、UC₁、UC₂群においてみられたように、形態よりも色彩によって不安定感がひきおこされていることが判る。CO₁、CO₂群の快的情緒群では、色彩からくる不快感が回避され、色彩と形態とがうまく統合されたイメージを形成している。円形の次に不安感をひきおこし難い図形として正三角形が考えられる。その次は、正四角形となって、辺数が少なく、角が少ない辺形になる程（円形に近づく程）不安定、不快感が減少し、辺数が五角形、六角形、更に不等辺図形になるにつれて、不安感、不快感は増大する傾向にあるといえよう。また、角の少ない四辺形でも図形6、7にみられる如く、図形の置かれた方向や位置によって攻撃的な感情を投影させ易くしていることも判明した。筆者が門前（1982）の研究の中で、安定した図形と不安定感とは高い相関関係にあるのではないかと推論したが、ここでもそれが確認されたと考えてよいだろう。

また、図形の中に描かれた実線は、動きの方向性を暗示するはたらきをしていると考えられる場合が多く、下に向かうか、上に向かうか、前に向かうか、動く方向を規定しているように考えられる。

更に、灰色系列の中で注目すべき内容として、図形5のステンドグラス、結晶、図形9の雪、図形10の亀の甲、図形11の豆腐、などである。これらはロールシャッハ図版のⅥ図のshading（濃淡）反応として分析されるのと同様の性質を有する反応内容ではないかと考えられた。灰色という色彩が、shading効果を表わし、灰色以外の白色の図形においても立体的で、そのものの材質感（たとえば、固さや柔らかさ）を与えるような反応を促している。上述以外の反応としては、広がる動き（波紋など）を感じさせる反応を多く示していることから明らかである。ロールシャッハ法におけるshading反応は、母子の愛情関係や基本的安全感が幼児期に確立されているか否かの指標と考えられ、この愛情交流に欠ける体験をしているとshading反応を拒否したり、反応を示しても、硬い材質反応や漠然とした反応内容を多く示すといわれている（Klopfcr, 1956；河合, 1970）。

本研究においては、母子の愛情関係とか基本的安全感の確立といった幼児期体験にまでさかのぼって推論することは不可能であるが、少なくとも灰色の色彩が漠然とした不安感を喚起させ、増大させている刺激になっているということが明白となった。更に白色図形にまでもその傾向が及んでいるということは、灰色—白色の対比が、黒色—白色の対比に比べて、明瞭に識別できにくい明度を有していたため、白色図版に残象効果が及んでいったものと解される。

臨床的にも、抑うつ傾向や、不安傾向の強い人、明らかにうつ状態であったり、うつ病と診断された人のロールシャッハ反応は、黒色図形（Ⅰ、Ⅴ図）やshading図版（Ⅳ、Ⅵ、Ⅶ図）に対して拒否的であったり、形態のみの反応であったりして、運動反応は少ないとされてきているが、本実験では、むしろ、不快な動きを伴った反応がかなり多く認められていることから類推して考えると、不安定な状態や、不快な情緒状態では動きのなかで不安を解消しようとする試みが強くはたらいっているように思われた。

これらの結果から更に、今後も、基礎的な実験をつみ重ねて、臨床や臨床場面における人間の行動の理解を深める一助となるよう、個体の認知行動の一環

としての投影のメカニズムについてさまざまな側面から実験的に解明してゆきたいと思う。

引用文献

- 片口安史 1969 ロールシャッハ・テスト心理診断法詳説 牧書店
- 河合隼雄 1970 臨床場面におけるロールシャッハ法 岩崎学術出版
- P. ギョーム著 八木晃訳 1967 ゲシュタルト心理学 岩波現代叢書
- Klopfers, B., Ainsworth, M.D., Klopfers, W.G., & Holt, R.R., 1954, Developments in the Rorschach technique, vol. 1. New York : World Book Company.
- Klopfers, B., & Kelley, D., 1956, Developments in the Rorschach technique. vol. II. New York ; World Book Company.
- 門前豊志子 1982 情緒的快・不快が投影的運動知覚に及ぼす影響 心理学研究 vol. 53, No.5, 266-273
- Schafer, R. 1954 Psychoanalytic Interpretation in Rorschach testing. Theory and application. New York : Grune & Stratton.